

はじめに

本書は、近世の名医・張錫純の著作《医学衷中参西録・全三冊》（河北科学技術出版社，1985年）を参照して翻訳・編集したものである。翻訳本は2001年に本会より既に一部が医歯薬出版より出版されたが現在絶版となっている。希有の中医学書であると同時に臨床医学の啓蒙書でもある本書をより多くの読者に知っていただくために、今回全面的に翻訳をしなおし、張錫純自身が執筆した本文と書簡をほぼ収載して読者の臨床の役に立ちやすい組み立てとした。原著は時代順に書かれており、同じテーマであっても張氏の経験から訂正を加えている箇所が多いので、翻訳も原則として時代順に配した。ただ、テーマについては利便性を考えて、大きく傷寒・温病と内傷雑病（薬物講義を含む）に分け、最後に基礎理論および書簡とし、三部に分ける。本巻ではそのうちで傷寒および温病にあたる箇所を時代順に抜粋して翻訳した。

張錫純は、字を寿甫といい、河北省塩山県の人で、1860年〔清・咸豊10年、日本の万延元年〕に生まれ1933年〔民国22年、日本の昭和8年〕に没した近世の名医である。豊かな教養人であるとともに、「読まない書物はない」と称されるほどの広汎な中医学の学識と、これにもとづく独自の深い認識をもっており、明快な理論のもとに病因・病機・病態および治法方薬についての解説を行った。

自序にもあるように知識層の家系に生まれ、幼児期から父親の薫陶を受けて育ち、長じて2度の科挙の試験に挑んで失敗したのち、「良相為らざれば、必ず良医為らん」との祖先の垂訓を守って医学の道へ入った。1918年に奉天〔瀋陽〕の立建中医院・院長に就任し、系統的な臨床経験を積むと同時に、多数の論文を医学雑誌に投稿して名声をあげて、当時の「名医四大家」の一人にあげられ、張生甫・張山雷とともに「かいつういしや名醫三張」とも称された。1926年に天津に居を移し、中西医匯通医社およ

び国医の通信教育学校を設立し、多くの後継者を養成した。書中に多くの受業〔師に対する弟子の自称〕が登場するのはこのためである。日中は診療し夜間は著述にいそしむ生活を続け、1933年8月8日74歳で病逝した。真面目で熱心かつ慈愛に満ちた人物であることが、自序、経歴および書中の記述からくみとれる。

自著に「衷中参西」と名づけたように、張錫純は中西医匯通派〔中西医結合派〕と目されている。アヘン戦争以降に欧米列強の侵入を許し半植民地と化した中国では、医学においても西洋医学の影響を受けざるをえなくなったことを反映している。書中に「西洋薬が中国に入って以降、維新主義者は競争してこれに走り、守旧主義者は汚らわしいもののようにみなすので、ついに互いに牴牾〔くい違ていごい〕を生じ、終いには交流し難くなっている。私は凡才であるが、日常の用薬に喜んで多くの西薬の長所を取りいれて中薬の短所を補って、当初から両者に敷居をつくらない。したがって、拙著を衷中参西と命名した。西洋医学の用薬は局部治療で病の標に重点があるが、中医学の用薬は原因治療を求め病の本に重点がある。結局、標・本は当然兼顧すべきで、難治の証に遇った場合は、西薬でその標を治し中薬で本を治せば必ず捷効するはずで、臨床でも確かに手応えを感じている」と述べ、当時の中国での医学界の状況を示すとともに、中・西両医学の特徴を分析している。すなわち、迎合して無批判に西洋医学を取り入れるのではなく、「衷中」すなわち中医学という確固たる土台のもとに、「参西」すなわち西洋医学の学説・化学・薬物などを積極的に学んで有益なものを採用し、中医学をより発展させようとの意図である。

しかしながら、当時の西洋医学は今日からするとかなり未熟で、治療面でもみるべき所が少なく、当時の薬物も現在では過去の遺物になってしまっており、さらには中医学に立脚する著者に西洋医学に対する誤った理解や牽強附会がみられるために、本書では西洋医学に関連した記述を一部割愛した。また現代医学での治療が確立して、漢方薬での治療が行われないものでは、訳注として説明を加えた。しかし、当時の考え方

を知るうえでの重要な資料でもあるので、ほぼ変更を加えずに記載している。本書は現代西洋医学を十分に学ばれた読者を対象としている。水銀製剤や鉛含有物質など現在では治療に用いることは許されないものもあるので、理解してお読みいただきたい。

《医学衷中参西録》は1918～34年の16年間に次々と刊行され、全七期30巻からなっている〔1957年に遺稿が第八期として加えられた〕。発行の状況は以下のようである。

第一期 各種病証と自製新方 1918年出版。

第二期 各種病証と自製新方 1919年出版。

第三期 各種病証と自製新方 1924年出版。

以上は、前三期合編上下冊・8巻としてまとめられ、1929年出版。

第四期 5巻 薬物解説 1924年出版。

第五期 上下冊・8巻 各種医論 1928年出版。

第六期 5巻 各種症例 1931年出版。

第七期 4巻 傷寒論病証 1934年出版。

この後、全七期30巻に第八期を加え、《医学衷中参西録》上中下の三冊本が、1934年に河北人民出版社から刊行され、これが現在に至っている。

以上のように、原著は約16年にわたり次々と増補改訂しながら書かれており、後になって病証を総括したり新たに医論を補充したり、同じ病証の症例を追加するといった配慮がなされているので、相互に参照することが理解を深めるうえで最も望ましい。

本書によって新たな深い認識が得られ、臨床での成果がより高められることを期待している。

張錫純 自序

人生には大きな願力〔願いと努力〕があればこそ、偉大な建樹〔功績〕が残る。一介の寒儒で、起居する草茅にはこれといった建樹はないが、もとよりその願力は尽きえない。老安友信少懷〔《論語》老はこれを安んじ、友はこれを信じ、少わかきはこれを懐けん〕は孔子の願力である。まさに一切の衆生をして皆仏と成らしめんとは如来の願力である。医は小道ではあるが、実は濟世活人の一端である。したがって医を学ぶものにして、身家温飽をなさんと計るは則ち願力小さく、濟世活人をなさんと計るは則ち願力大である。そしてこの願力が私にあるのは、また私だけの願力ではなく、実は受け継がれてきた祖訓である。私の原籍は山東諸城にあり、明代に直隸塩山の山辺務裏に居を移し代々儒学者を生業とした。先祖は三公〔官僚としての最高位の三つの官職〕を友とし編纂された系譜を受け継いでいるが、垂訓はここにあって、凡そ後世の子孫は、読書のほかに医を学ぶべしと謂う。つまり范文正公〔北宋の政治家、文人〕の「良相たらずんば、必ず良医たれ」の意である。錫純が幼時読書を学んだ先嚴〔亡父〕丹亭公は、かつてこの言葉を述べて錫純に教えた。やや年長になると、さらに方書を授け、かつ大意を指し示した。通読のあいまにはここで遊び、多くの良いものを得て、さらにまた祖訓をまもった。ただ当時まさに挙子〔科挙試験受験者〕の勉強をしていたので、これにまだ大きな力を割けえなかった。のちに二回の秋闈〔秋の科挙試験〕に不合格となり、壮年であったが続ける気を失った。そこで広く方書を求め、古くは農〔神農、農業と医薬の神であり、《本経》と略称される《神農本草経》を著したとされる〕軒〔黄帝、軒けんえんの丘に住んだとされ、《内経》の中心人物〕から、最近の国朝〔清〕の諸家の著述にいたるまで合計するとあらかた100種以上の書籍を読み調べた。《本経》と《内経》は、開天辟地の聖神と医学の鼻祖のこが貽したもので、こ

れこそ淵海〔内容が深奥、広範であること〕な医学と知った。漢末になると張仲景ちやうちゆうけいが現れて《傷寒論》《金匱要略》を著し、《本經》《内經》の功臣となった。晋代の王叔和おうしゅくわ〔《脈経》を著し、当時すでに散逸していた張仲景の《傷寒雜病論》を撰輯した〕、唐代の孫思邈そんしぼく〔中国史上最初の医学百科全書である《備急千金要方》《千金翼方》を著す〕・王燾おうとう〔膨大な前人の医書を編輯し理論研究と治療方剤をはじめて統合整理し《外台秘要》を著す〕、宋代の成無己せいむき〔《内經》に基づいて《傷寒論》を分析注釈し、《注解傷寒論》を著す〕、明末の喻嘉言ゆかげん〔《傷寒論》の条文を分類整理研究して《尚論篇》を著す〕らも、やはり張仲景の功臣である。国朝には医学が発展して人才が輩出し、張志聡ちやうしそ〔《素問集注》《靈樞集注》などを著す〕・徐大椿じょたいちん〔《医学源流論》《神農本草百種録》などを著す〕・黃元御こうげんぎょ〔《素靈微蘊》《傷寒懸解》《金匱懸解》などを著す〕・陳念祖ちんねんそ〔《神農本草經読》《傷寒論淺注》《金匱要略淺注》などを著す〕らの諸賢は、いずれも張仲景および淵源をなす《本經》《内經》を踏襲しており、したがって彼らの著した医書はいずれも正統な医学である。ただし、晋・唐から現代にいたる諸家の著述はよくできてはいるが、いずれも瑣末にいたるまで旧態の伝承に汲々とし、初めから日進月歩して中華医学を進歩させようという意図がない。古を師として貴ぶということは、古人の規矩準繩に縛られるのではなく、それを手段として自分の性靈〔心の靈妙な働き〕を瀹あい神智〔精神と知恵〕を益することである。性靈・神智が活発になり充溢すれば、さらに古人の規矩準繩を貴んで取り上げ、これを拡充し、変化し、引伸触長〔意味を推し広め同類のものに出会えばそれらすべてに及ぼす〕して、古人が『後世の者たちもなかななかやるものだ』とし、畏れいるようにすべきである。世の中のことはいずれもそうあるべきで、医学だけが違うはずはない。私、錫純はこうした考えで、何年もたゆまず医学を研究し、たまたま人のために処方をする、すぐに得心応手〔思い通りの結果が得られる〕し、宿痾の病を挽回することができた。先慈〔亡母〕の劉太君〔身分の高い婦人に与えられる称号〕が家におられたころ、私は親孝行するいとまがなく

ることを恐れて、あえて軽々に他人の往診には応じなかった。たまたま急症であるからと診察の求めがあっても、みだりに遽^{あわただ}しく応じるようなことはなかった。先慈は『病家が医者を待ち望むのは、水に溺れるものが援けを求めているようなものです。あなたが治せるのなら、急いで往って救っておあげなさい。しかし、臨床では十分に注意し、鹵莽^{ろもう}〔粗雑〕なことをして人を害さないように慎まねばなりません』といわれたので、『唯唯〔はいはい〕』と教えを受け、以後臨床家としてほとんど1日たりと休むことなく、今日まで10余年に至る。ここに十数年の経験の方で、多くの効果があった頻用処方を集めると、ちょうど大衍〔五十〕の倍数である。方後には詮解と重要な医案をつけ、また同時に西洋医学の説と方中の筋道を対比して明らかにし、集めて八巻として《医学衷中参西録》と名づけた。ある人は、ざっと目を通して「あなたの書物を読むと、先人が指摘していないことを啓発しており、誠に医学の進歩である。しかし、今般あらゆることが西欧化しており、編中では西洋医学の説を採用したとはいえ、あまり西洋薬を採り入れてないので、恐らくはこの道は最高峰に達してはいない」と問う。そこで「中華の苞符〔河図洛書〕の秘は、三墳〔古代の書〕より啓き、伏羲の《易経》《神農本経》《黄帝内経》がこれである。伏羲が画^かいた《易》は、文字ができる以前から存在し、従って六十四卦はその象に止まるが、しかしながらよく万事万物の理を包括し、文王、周公、孔子がこれを解明したとはいえ、なおまだ余蘊がある。《本経》《内経》が包括する医理は、極めて精細で奥が深く、ずば抜けて量りがたく、やはり《易経》が万事万物の理を包括するがごときである。周末の秦越人〔扁鵲〕より後、歴代の諸賢は、いずれもそれぞれに新しい考え方があるが、三聖人が《易経》を解明したことと較べれば実際及ばず、したがってその中には余蘊がなお多い。私は古人より後の時代に生まれたので、古人が完成できなかった仕事を完成させねばならず、古いものを助けて新しいものにし、わが中医学の輝きを全地球上に喧伝できなければ、それは私の罪である。私、錫純は毎日このことを心にとめて、老いを忘れてたゆまず努力を続けている。こ

れまで西洋医学を涉獵したが、実はまだその薬物を一つひとつ試験する暇がない。さらにその薬の多くは劇薬であり、また臨床で安易に試しえないので、多くの西洋薬を採用できていない。しかし、本編で取り入れた西洋医学は医学理論を採用しただけではなく、常にその化学理論を採り入れ、方薬の運用には中西医学を融合させて一体化し、その薬を採用した場合にも、記問の学〔いい加減な理解でやたら講釈するような学問態度〕としているのではない。ただ学問の道は、年毎にあらゆる分野で重要な進歩があり、この編が既に完成した後も、西洋医学を広範に読みあさって、さらに信ずるべき説と用いるべき方を採用し、試して確実に有効ならば、続編にする。志があつて未だ至らぬ事でも、志さえあれば必ず成就する。

巳酉孟春塩山張錫純寿甫氏書于志誠堂